

特平 8-214378

【書類名】

図面

【図1】

センスプライマー

Tyr Leu Ala Met Asn Lys

5'- TAC CTA GCA ATG AAC AA -3'

T C C T

G G

T T

アンチセンスプライマー

Tyr Asn Thr Tyr Ala Ser

3'- ATA TTA TGA ATA CGA AG -5'

G G C G C

G G

T T

【図2】

5' RACE法;

A: 5'-CCT CTC TTT CAG TTT ACA GTC -3'

A': 5'-GAT GCA TAG GTA TTG TAT CCA T-3'

B: 5'-TCC ATT TTC CTC TAT CCT CTC -3'

X: 5'-GCG AGC TCA AGC TTT TTT TTT TTT TTT TT-3'

Y: 5'-GCG AGC TCA AGC TTT TTT -3'

3' RACE法;

C: 5'-AGA AGG GGA AAC TCT ATG GC -3'

D: 5'-GAC TGT AAA CTG AAA GAG AGG -3'

D': 5'-GAA ACT CTA TGG CTC AAA AGA A-3'

X: 5'-GCG AGC TCA AGC TTT TTT TTT TTT TTT TT-3'

Y: 5'-GCG AGC TCA AGC TTT TTT -3'

全配列

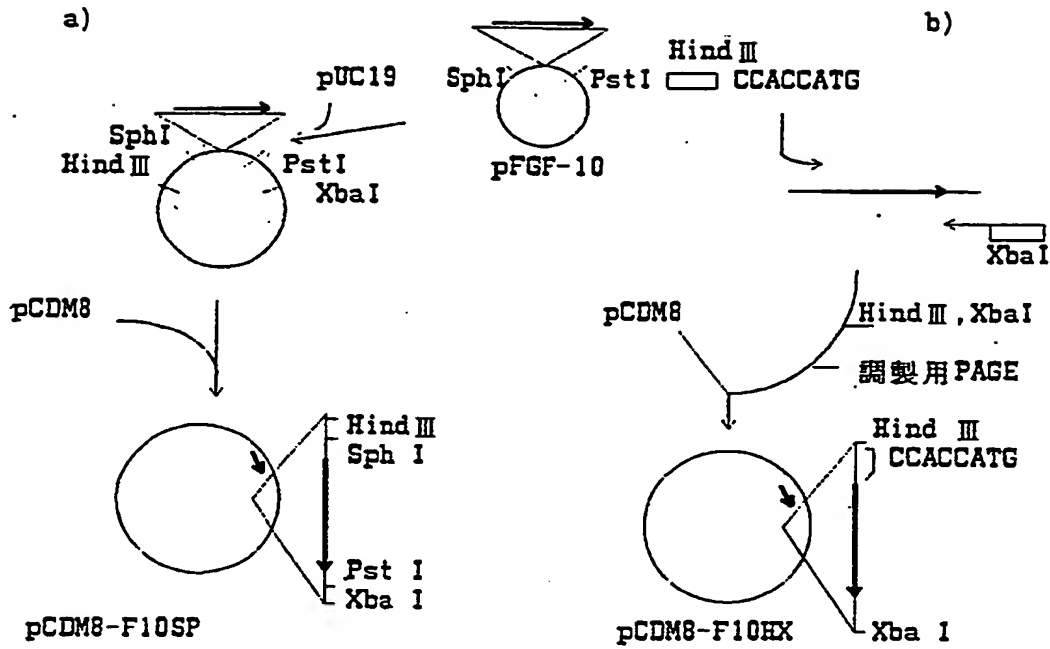
E: 5'-CTT CCA GTA TGT TCC TTC TG-3'

増幅用

F: 5'-GGC AAA GAG TCA TTG GTT GT-3'

F': 5'-GTA CAC TCA TAG AGG AAG GC-3'

【図3】



【図4】

推定翻訳開始コドン上流をコザックのコンセンサス配列に置換するために用いたプライマーの塩基配列

名称	塩基数	配列(5' → 3')
F10HS	35mer	TTTTAAGCTT CCACC ATGTGGAAGTGGATACTGAC
F10XR	27mer	AAAATCTAGA GTCATTGGTTGTACTGC

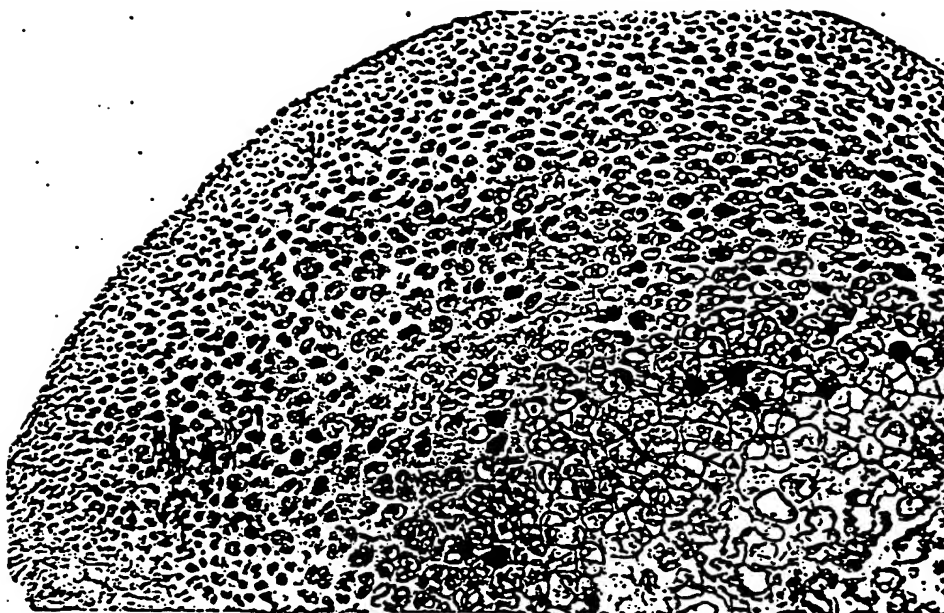
反応条件:

pFGF-10 (0.5 μg/μl)	2	μl
10xPCR buffer	10	
10 μM F10HS	2.5	
10 μM F10XR	2.5	
dNTP mix (TaKaRa)	8	
dH2O	74.5	
AmpliTaq	0.5	/100 μl

94℃	30 秒] x 10回
94℃	60 秒	
56℃	60 秒	
72℃	60 秒	
72℃	9 分	

変異導入切片

【図5】



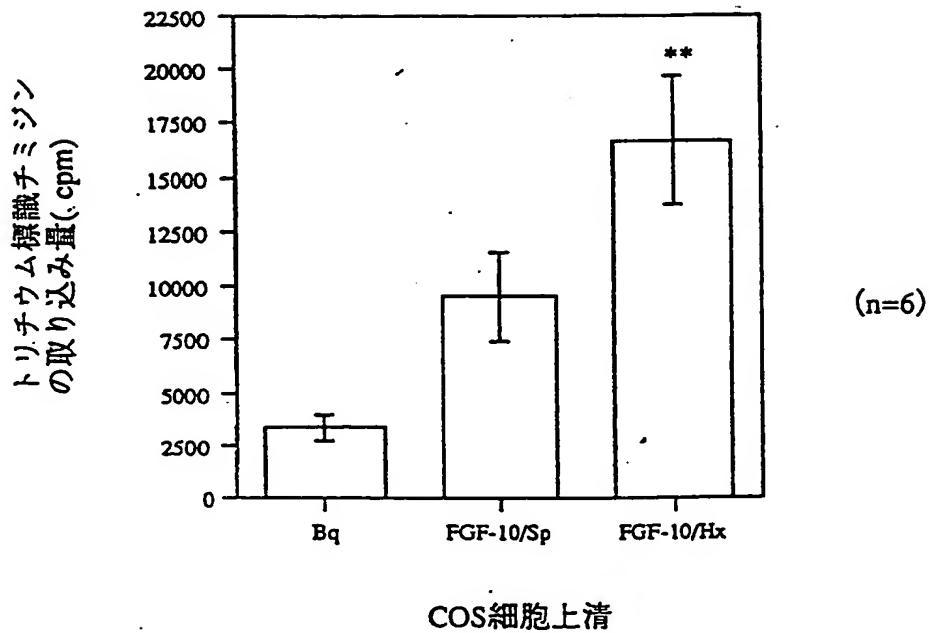
(A) 関節軟骨の薄切り組織標本の顕微鏡写真



(B) 骨端軟骨板の薄切り組織標本の顕微鏡写真

図面代用写真

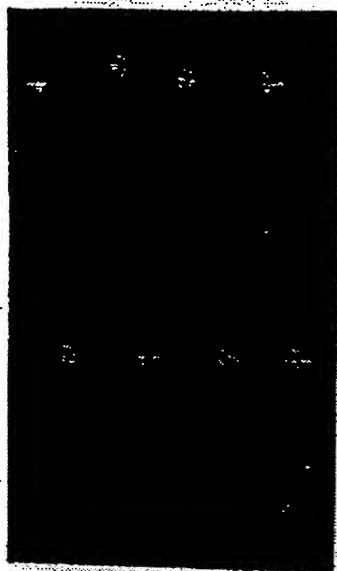
【図6】



COS細胞上清添加後のFRSK細胞によるトリチウム標識チミジンの取り込み量の変化。

値は平均±標準誤差で、有意差はBqに対して**； $P<0.01$ で示した。

【図7】



試験例におけるヒトFGF-10投与群の脛骨軟X線写真
画像処理像

(上: FGF-10 10.6 µg, 下 FGF-10 21.2 µg)

【図8】



試験例における対照群の脛骨軟X線写真画像処理像

【書類名】 特許願

【整理番号】 132317

【提出日】 平成 8年 7月24日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 C12N 15/19

【発明の名称】 線維芽細胞増殖因子 F G F - 1 0

【請求項の数】 10

【発明者】

 【住所又は居所】 京都市左京区吉田下阿達町 京都大学薬学部内

 【氏名】 伊藤 信行

【発明者】

 【住所又は居所】 大阪市此花区春日出中 3 丁目 1 番 9 8 号 住友製薬株式会社内

 【氏名】 根来 尚温

【発明者】

 【住所又は居所】 大阪市此花区春日出中 3 丁目 1 番 9 8 号 住友製薬株式会社内

 【氏名】 勝又 隆

【発明者】

 【住所又は居所】 大阪市此花区春日出中 3 丁目 1 番 9 8 号 住友製薬株式会社内

 【氏名】 田頭 秋三

【特許出願人】

 【識別番号】 000183370

 【氏名又は名称】 住友製薬株式会社

 【代表者】 武内 正康

【代理人】

 【識別番号】 100107629

 【弁理士】

特平 8-214378

【氏名又は名称】 中村 敏夫

【電話番号】 06-466-5214

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 平成 7年特許願第345689号

【出願日】 平成 7年12月 7日

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 平成 8年特許願第103240号

【出願日】 平成 8年 3月28日

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9602171

整理番号 132317

【書類名】要約書

【要約】

【課題】新規なアミノ酸配列を有する線維芽細胞増殖因子FGF-10をコードするDNA、組換蛋白とその製法、さらに骨／軟骨損傷治療剤を提供する。

【構成】特定のアミノ酸配列をコードするDNAを組み込んだ発現ベクターを、宿主細胞に導入し、得られた形質転換体を培養して蛋白を産生させ、組換FGF-10を得る。この組換FGF-10蛋白を用いて、骨／軟骨損傷治療効果を確認した。

【効果】FGF-10は、細胞増殖作用を利用した医薬、実験試薬として応用し得る。

【選択図】なし

特平 8-214378

【書類名】 職権訂正データ
【訂正書類】 特許願

<認定情報・付加情報>

【特許出願人】

【識別番号】 000183370

【住所又は居所】 大阪府大阪市中央区道修町2丁目2番8号

【氏名又は名称】 住友製薬株式会社

【代理人】 申請人

【識別番号】 100107629

【住所又は居所】 大阪府大阪市此花区春日出中三丁目1番98号 住
友製薬株式会社 法務部内

【氏名又は名称】 中村 敏夫

特平 8-214378

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000183370]

1. 変更年月日 1990年 8月 9日

[変更理由] 新規登録

住 所 大阪府大阪市中央区道修町2丁目2番8号

氏 名 住友製薬株式会社

特平 8-214378

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000183370]

1. 変更年月日 1990年 8月 9日

[変更理由] 新規登録

住 所 大阪府大阪市中央区道修町2丁目2番8号

氏 名 住友製薬株式会社

【書類名】明細書

【発明の名称】線維芽細胞増殖因子 FGF-10

【特許請求の範囲】

【請求項1】配列番号：1もしくは配列番号：2に示すアミノ酸配列のポリペプチドである線維芽細胞増殖因子をコードする塩基配列、またはこれに相補的な塩基配列を包含する組換えDNA。

【請求項2】配列番号：3もしくは配列番号：4に示す塩基配列またはこれに相補的な塩基配列を包含する請求項1記載のDNA。

【請求項3】請求項1のDNAを担持する発現ベクター。

【請求項4】請求項3の発現ベクターを宿主に導入して得られる形質転換体。

【請求項5】宿主が動物細胞または大腸菌である請求項4記載の形質転換体。

【請求項6】請求項4の形質転換体を使用することを特徴とする組換え線維芽細胞増殖因子の製造方法。

【請求項7】配列番号：1もしくは配列番号：2に示すアミノ酸配列またはその主要部分を包含するポリペプチドである組換え線維芽細胞増殖因子。

【請求項8】請求項5の形質転換体が生産し、細胞増殖活性を示す事を特徴とする、配列番号：1もしくは配列番号：2に示すアミノ酸配列またはその主要部分を包含するポリペプチドである組換え線維芽細胞増殖因子。

【請求項9】請求項7もしくは請求項8の組換え線維芽細胞増殖因子を有効成分として含有する骨／軟骨疾患または骨／軟骨損傷治療剤。

【請求項10】請求項7もしくは請求項8の組換え線維芽細胞増殖因子を有効成分として含有する創傷治癒促進剤。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、新規な線維芽細胞増殖因子（以下、FGFと略称）およびその組換え製法に関する。更には、当該因子を含有する医薬に関する。

【0002】

【従来技術】FGFは、1970年代に血管新生因子として発見された。

当初、酸性線維芽細胞増殖因子（a F G F）や塩基性線維芽細胞増殖因子（b F G F）が研究され、その構造や広範な細胞増殖促進作用が明らかにされてきた〔D. Gospodarowics 他；ネイチャー（Nature）249巻123頁（1974）、Burgess, W. H. および Maciag, T. ; Ann. Rev. Biochem. 58巻575-606頁（1989）、SUZUKI, F. ; Clinical Calcium. 4巻1516-1517頁（1994）〕。現在では、計9種類のFGF類が報告されており、それぞれのクローニング、構造解析も成されている〔細胞、27巻9号341-344頁（1995）〕が、それ以外のFGF類の存在については可能性のみ示唆されていた。

【0003】

一方、b F G Fやa F G Fはその広範な細胞増殖促進作用を利用して、神経系、血管系や骨代謝系の疾患において、有望な治療剤となる可能性が検討されているが、現在もまだ、臨床治験に於ける有用性が証明されるには至っていない。新規なFGFでの同様の研究が待望されている。

【発明が解決しようとする課題】本発明の目的は、新規なFGFの遺伝子を発見し解析することによって、その組換え蛋白の工業的生産方法を提供することである。

【0004】

【課題を解決するための手段】発明者は、未知のFGFのDNAについて鋭意検討を行った結果、全く新しいタイプのFGF（以下、FGF-10と略称する）のDNAを取得することに成功し、本発明を完成するに至った。

本発明は、以下に示すように、FGF-10をコードするDNA、当該DNAを担持した発現ベクター、形質転換体、それらを用いた組換え蛋白の製造方法、および組換え蛋白、更には、FGF-10組換え蛋白を有効成分として含有する医薬に関するものである。

【0005】

（1）配列番号：1もしくは配列番号：2に示すアミノ酸配列のポリペプチドである線維芽細胞増殖因子をコードする塩基配列、またはこれに相補的な塩基配列

を包含する組み換えDNA。

(2) 配列番号：3もしくは配列番号：4に示す塩基配列またはこれに相補的な塩基配列を包含する請求項1記載のDNA。

(3) (1)のDNAを担持する発現ベクター。

(4) (3)の発現ベクターを宿主に導入して得られる形質転換体。

(5) 宿主が動物細胞または大腸菌である(4)記載の形質転換体。

(6) (4)の形質転換体を使用することを特徴とする組換え線維芽細胞増殖因子の製造方法。

(7) 配列番号：1もしくは配列番号：2に示されるアミノ酸配列またはその主要部分を包含するポリペプチドである組換え線維芽細胞増殖因子。

(8) (5)の形質転換体が生産し、細胞増殖活性を示す事の特徴とする、配列番号：1もしくは配列番号：2に示すアミノ酸配列またはその主要部分を包含するポリペプチドである組換え線維芽細胞増殖因子。

(9) (7)もしくは(8)の組換え線維芽細胞増殖因子を有効成分として含有する骨/軟骨損傷治療剤または骨/軟骨疾患治療剤。

(10) (7)もしくは(8)の組換え線維芽細胞増殖因子を有効成分として含有する創傷治癒促進剤。

【0006】

本明細書において、用語の意味または定義は下記の通りである。

・FGF-10：配列番号：1もしくは配列番号：2に示されるアミノ酸配列またはその主要部分を包含する哺乳類の産生する線維芽細胞増殖因子。主要部分とは、前記配列から、シグナル(プレ)配列またはプロ配列が除かれたマチュア蛋白アミノ酸配列を意味する。すなわち、配列番号：1における37位グルタミン(Gln)から215位セリン(Ser)に到る179アミノ酸残基からなるアミノ酸配列、または配列番号：2における38位グルタミン(Gln)から208位セリン(Ser)に到る171アミノ酸残基からなるアミノ酸配列である。

なお、現在公知の技術により、配列番号：1もしくは配列番号：2に示されるアミノ酸配列またはその主要部分の一部のアミノ酸残基を欠失、置換あるいは付加させた蛋白質を製造することが可能であり、ランダムスクリーニング あるいは

は他のFGFファミリー蛋白に於ける配列改変研究の知見から、本件発明のFGF-10と生理活性の点で同質の改変蛋白質を創製することが可能である。これらの改変蛋白質も線維芽細胞増殖因子活性を示すかぎり、本件発明の技術範囲に属する物である。また、FGF-10は、配列番号：1に示されるアミノ酸配列の50-52位に存在するAsn-Ser-Ser、203-205位のAsn-Thr-Ser、配列番号：2に示されるアミノ酸配列の51-53位に存在するAsn-Ser-Ser、196-198位のAsn-Thr-Ser、二か所にN結合型糖鎖結合部位を有する蛋白質であるが、一般的には、糖鎖の有無に関わり無く生理活性を有する。公知の宿主の選択により糖鎖の種類を変更すること、あるいは除去することができるが、これらの糖鎖改変蛋白質も下記の線維芽細胞増殖因子活性を示すかぎり、本件発明の技術範囲に属する物である。

・線維芽細胞増殖因子活性：細胞増殖刺激作用、造血幹細胞増殖作用、血管新生作用など種々の細胞に対する細胞増殖促進作用、細胞分化誘導作用や細胞外マトリックス改変作用などの分化調節作用、神経細胞の生存維持作用等、多岐に渡るFGF類の生理活性のうちの少なくとも一種〔臨床検査 38巻、11号、219-221頁（1994年 増刊号）〕。FGF-7において見られるような、ラット胎児由来表皮細胞（FRSK細胞）を始めとする上皮細胞由来細胞株の細胞増殖刺激作用も、当該活性に含まれるものとする。

・骨／軟骨損傷治療剤または骨／軟骨疾患治療剤：事故による骨折や手術に伴う骨／軟骨の切除など、骨／軟骨の物理的な損傷の治療を促進するための医薬製剤または、骨／軟骨形成の低下を主たる症状とする疾患を治療するための医薬製剤であり、下記の医薬用途を指向するものである。

（1）骨欠損治療剤、（2）骨折治療剤、（3）骨粗鬆症治療剤、（4）軟骨組織修復促進剤、（5）関節軟骨組織修復治療剤、および、（6）変形関節症治療剤。

・創傷治癒促進剤：事故による物理的／化学的要因による外傷や凍傷、熱傷の治療促進のための医薬製剤。放射線障害、床擦れや糖尿病によって生じる皮膚潰瘍など、難治性の皮膚筋肉組織障害の治療促進剤も含む。

【0007】

以下、本発明をより詳細に説明する。

〔FGF-10遺伝子の取得〕

本発明のFGF-10をコードするDNAは、公知の遺伝子工学的方法にて製造出来る。すなわち、哺乳類の生体組織あるいは培養細胞から、mRNAを単離し、それから二本鎖cDNAを得ることができる。さらに、このcDNAをプライマーに用いて、PCR法を行い、増幅し、適宜配列を決定できる。これらはいずれも専用キットが市販されている。なお、mRNAの原料の生体組織や培養細胞は特に種類を限定されるものではないが、特に、約14日令のラット胎児を用いる方法が好適である。肺や関節組織におけるmRNA発現が比較的多いため、肺細胞、骨／軟骨由来細胞由来の培養細胞等も用いうる。市販の成人ヒト肺由来ポリ(A)+RNA〔クローンテック社〕などを使用する方法も簡便で好ましい。

〔0008〕

また、本特許明細書に開示のFGF-10をコードするDNA配列の中から、適当な配列をDNAプローブとして用い、種々の生体由来のcDNAまたはゲノム遺伝子ライブラリーからクローニングすることができる。

遺伝子ライブラリーは常法に従って、下記のように調製する。1. 動物組織を凍結粉末化したものをRNase及びプロテアーゼ処理し、高分子量DNAを沈澱させて得る。DNA抽出物については、市販のものが利用できる〔クローンテック(clontech)社等〕。2. 制限酵素(EcoRI等)で部分的に切断し、エタノール沈澱でDNA断片を得る、3. DNAリガーゼを用いて、λファージにDNA断片を挿入し、4. 市販のin vitroパッケージングキットを用いて、パッケージングを行い、遺伝子ライブラリーを作る。

DNAプローブは、本特許明細書に開示のFGFファミリー蛋白をコードするDNA配列の中から、特異性の高い配列を選ぶ。常法により、化学合成し、³²P等でラベルすることができる。

〔0009〕

〔FGF-10蛋白質の製造〕

こうして得られたFGF-10のcDNAを組み込む発現ベクターとしては、適当な大腸菌、枯草菌、酵母、動物昆虫細胞等の宿主内で増殖できるプラスミドや

ファージが選ばれるが、例えば、大腸菌由来の pBR322、pBR325 [ジーン (Gene) 4 巻 121 頁 (1978)]、枯草菌由来 pUB110 [バイオケミカル・バイオフィジカル・リサーチ・コミュニケーション (Biochem. Biophys. Res. Commun.) 112 巻, 678 頁 (1983)]、COS 細胞に好適な pCDM8 等が挙げられる。cDNA をプラスミドに組み込む方法としては、常法が、マニアティス (T. Maniatis) 他、モレキュラー・クローニング (Molecular cloning)、コールドスプリング ハーバー ラボラトリー (Cold spring harbor lab.) 239 頁 (1982) に記載されている。

【0010】

宿主は、ベクターの導入により形質転換され、FGF-10 を産生できる生物や培養細胞であれば、特に限定されない。細菌としては、大腸菌、枯草菌 (バチルス類) 等、酵母としては、サッカロマイセス属、トルラ属、ピキア属等、動物細胞としては、COS 細胞、CHO 細胞、NSO 細胞等が代表例である。培養昆虫細胞、真菌、植物細胞、単細胞系だけでなく、目的蛋白質遺伝子を組み込まれた昆虫や哺乳類、植物も宿主の範疇に入る。

原核細胞産生系としては、大腸菌またはバチルス属細菌が一般的に用いられ、特に、プロテアーゼ産生能を低下させたバチルス・ブレビス (Bacillus brevis) は、分泌発現のための宿主として有用である (参照: 特開平 6-296485、特開平 6-133782、Y. Sagiya et al.; Applied Microbiol. Biotechnol. 42 巻, 358-363 頁 (1994) など)。

【0011】

形質転換体から、公知の方法、例えば、コロニー・ハイブリダイゼーション法 [ジーン (Gene), 10 巻 63 頁 (1980)] および DNA 塩基配列決定法 [プロシーディングス オブ ナショナル アカデミー オブ サイエンス (Proc. Natl. Acad. Sci. USA) 74 巻 560 頁 (1977)] を使い、所望のクローンを選出する。また、COS 細胞にて一過性に発現させ、培養上清の生理活性を評価してクローン選択することも可能である。

【0012】

発現されたFGF-10蛋白の生理活性は、常法により容易に検出できる。たとえば、公知のFRSK細胞など、上皮細胞の増殖促進作用を測定することにより評価できる。

【0013】

クローン化されたDNA含有プラスミドは、そのままあるいは制限酵素で切り出して利用することが可能であり、種々の宿主に適応した発現ベクターに組み込んで発現させ、FGF-10蛋白を大量に製造することができる。発現方法は特に制限されず、細菌を用いた融合発現、分泌発現および直接発現、また真核細胞を用いた発現など適宜、当該分野で公知の組換え蛋白生産技術が応用しうる。

【0014】

組換え技術により生産されたFGF-10蛋白は、生化学の分野で常用される精製方法にて精製が可能である。イオン交換クロマトグラフィー、ゲル濾過、逆相HPLC、硫酸沈澱、限外濾過、SDS-PAGEなどが適宜組み合わせて用いられるが、FGF類の場合、特にヘパリン等のリガンドを用いたアフィニティークロマトグラフィー、抗体カラムクロマトグラフィーなどが大量精製に好適である。FGF-10蛋白に対する抗体は、ポリクローナル、モノクローナル共に、自体公知の方法で作製し得る。FGF-10特異的抗体は抗体カラムに使用出来るだけでなく、ELISA等の免疫化学的定量法に使用できる。

【0015】

【作用】

上述の方法で得られたFGF-10蛋白は、細胞増殖促進作用を始めとする種々の生理作用を有しており、創傷治癒促進剤、循環不全治療剤、神経生存維持剤、発毛促進剤などの医薬用途に用いうる。特に、成体哺乳類の軟骨組織での発現が認められており、骨折治癒等の骨疾患治療剤、軟骨・結合組織の損傷治療剤への応用が考えられる。また、細胞増殖促進用の実験試薬としても使用しうる。

【0016】

【実施例】 以下の実施例によって、本発明をさらに詳細に説明するが、本発明はそれに限定されるものではない。

〔実施例1〕 FGF-10遺伝子の構造解析

・ラット遺伝子ライブラリーの調製

14日齢ウイスターラット胎児全組織から、常法〔Chomoczynski他、Anal. Biochem. 162巻, 156-159頁(1987)〕に従い、mRNAを調製した。そのラット胎児mRNAを鋳型に、ランダムプライマー(6mer)をプライマーとして、モロニーマウス白血病ウイルス逆転写酵素を用いてラット胎児cDNAを調製した。すなわち、ラット胎児ポリ(A)+RNA(5 μ g)を300ユニットのMoloney murine leukemia virus reverse transcriptase(GIBCO-BRL)、15ユニットのhuman placenta RNase inhibitor(和光純薬工業)および0.5 μ gのランダムプライマー(6mer)を含む反応溶液中で37℃60分インキュベートして、cDNAを得た。

【0017】

・FGF-3及びFGF-7に共通なプライマーの作成

既知の7種類のヒトFGFのアミノ酸配列を比較し、FGF-3、FGF-7間でアミノ酸配列が同一である2箇所(Tyr-Leu-Ala-Met-Asn-Lys、Tyr-Asn-Thr-Tyr-Ala-Ser)を選び、図1に示す2種類のFGFプライマーを作成した。

【0018】

・ラットFGFファミリーDNAの増幅

ラット胎児cDNAを鋳型にし、上記の2種類のFGFプライマーとTaq DNA polymeraseを用いたpolymerase chain reaction(PCR)法によりFGFファミリーDNAを増幅した。即ち、適当量のcDNA、0.05ユニット/ μ lのTaq DNAポリメラーゼ(和光純薬工業)および5 pmol/ μ lの前述のセンスまたはアンチセンスプライマーを含む反応溶液(25 μ l)を30サイクルのPCRに供した。反応後、溶液を8%ポリアクリルアミドゲル電気泳動にかけ、所望のサイズ(～110塩基対)のフラクションを電気泳動で溶出した。

【0019】

・ラットFGFファミリーDNAのスクリーニング

FGFプライマーにより増幅したFGFファミリーDNAをpGEM-T DNA vector (Promega) に挿入し、得られた組換えベクターを大腸菌 (XL1-blue株) に感染させ、DNAクローンを得た。cDNA配列の解析には、DNAシーケンサー373A (Applied Biosystems Inc.) を用いた。

各DNAクローンの塩基配列を決定したところ、既知のFGF-3、FGF-7のcDNA以外にも、既知のFGFファミリーペプチドと類似のアミノ酸配列構造を持つ (～50%) ペプチドをコードしている新規なFGFcDNAが単離された。これを、FGF-10と命名した。

【0020】

・ラットFGF-10cDNAの全翻訳領域の構造解析

上記実験にて判明したFGF-10cDNAの部分構造から、プライマーを作成し、Rapid Amplification of cDNA Ends (RACE) 法 [Frohman, PCR Protocols-A guide to methods and applications, Academic Press, pp. 28-38 (1990)] を利用して全翻訳領域を取得した。詳細は以下〔1〕～〔6〕に記述する。

【0021】

〔1〕 FGF-10cDNAの部分構造からプライマーA～D (図2、配列番号: 5、6、7および8) を作成し、また、RACE法用として、プライマーX及びY (図2、配列番号: 9および10) を作成した。〔2〕 ランダムヘキサオリゴヌクレオチドをプライマーとして用いてラット胎児mRNAを鋳型として逆転写酵素によりcDNAを合成した後、デオキシアデニン三リン酸の存在下に3'デオキシヌクレオチジルトランスフェラーゼを作用させて3'末端にポリ (A) 配列を付加した。このようにして得られたcDNAを鋳型としてプライマーBおよびXを用いてPCRを行った。さらに、プライマーAおよびYを用いてPCRを行った。得られた増幅断片をpGEM-Tに挿入し、大腸菌 (XL1-blue) を形質転換することによりクローン化した。数クローンの塩基配列を決定し

たところ、上記の部分配列の一部を含むクローンが得られたので、これを pFGF-10 (5') と命名した。〔3〕プライマー X を用いてラット胎児 mRNA を鋳型として逆転写酵素により cDNA を合成した。このようにして得られた cDNA を鋳型として、プライマー C および Y を用いて PCR を行った。さらに、プライマー D および Y を用いて PCR を行った。得られた増幅断片を pGEM-T に挿入し、大腸菌 (XL1-blue 株) を形質転換することによりクローン化した。数クロンの塩基配列を決定したところ、上記の部分配列の一部を含むクローンが得られたので、これを pFGF-10 (3') と命名した。〔4〕pFGF-10 (5') より得られた最も上流部分の塩基配列と、pFGF-10 (3') より得られた最も下流部分の塩基配列の塩基配列より、各々プライマー E および F (図 2、配列番号: 11 および 12) を作成した。〔5〕ラット胎児 mRNA を鋳型として、オリゴ dT をプライマーとして逆転写酵素により、cDNA 第一鎖を得た。これを鋳型としてプライマー E および F を用いて PCR を行った。得られた増幅断片を pGEM-T に挿入し、大腸菌 (XL1-blue 株) を形質転換することによりクローン化した。数クロンの塩基配列を決定したところ、pFGF-10 (5') より得られた最も上流部分の塩基配列と、pFGF-10 (3') より得られた最も下流部分の塩基配列の塩基配列を連続して保持するクローンが得られた。この中の 1 クロンのを選び、pFGF-10 と命名した。このプラスミドに担持される全翻訳領域を含む FGF-10 cDNA を解析した。〔6〕以上の結果を総合して配列番号: 3 の塩基配列 (804 bp) を決定した。

【0022】

・ラット FGF-10 の全アミノ酸配列の決定

上記実験で得られた FGF-10 cDNA の塩基配列より、FGF-10 cDNA の翻訳領域は 645 bp からなり、FGF-10 は配列番号: 1 で示される 215 アミノ酸からなる新規 FGF であることが明らかになった。アミノ酸配列の検討から、N 末端にシグナル配列を有する分泌型の蛋白であることが分かった。マチュア部分は、37-215 位で、179 アミノ酸からなるポリペプチドと目される。50-52 位に存在する Asn-Ser-Ser、203-205 位

のAsn-Thr-Serは、N結合型糖鎖結合配列であり、FGF-10は糖鎖を有している可能性がある。

【0023】

〔実施例2〕ラットFGF-10の哺乳動物細胞での発現

・プラスミドの構築

プラスミドpFGF-10（図3）をSph IとPst Iで消化し、ポリアクリルアミド電気泳動によりcDNA全長を含む断片を単離した。この断片をpUC19のSph I、Pst I消化物とライゲーションし、大腸菌JM109株を形質転換することにより、FGF-10 cDNAを含むプラスミドpUC-F10を得た。pUC-F10をHind III 及びXba Iで消化することによりFGF-10 cDNAを含む断片を切出し、哺乳動物細胞発現ベクターであるpCDM8のHind III、Xba I消化物とライゲーションし、大腸菌MC1061/P3株を形質転換することにより、CMVプロモーターの支配下にFGF-10 cDNAを有するプラスミドpCDM8-F10SPを得た。

一方、FGF-10 cDNAにおける推定翻訳開始コドン上流の塩基配列がコザックのコンセンサス配列からはずれていることから、本mRNAの翻訳効率が良い可能性があることが考えられた。そこで、翻訳効率の向上を目的として、推定翻訳開始コドン上流をコザックのコンセンサス配列に置換する変異を導入することとした〔マリリン コザック (M. Kozak)、ザ・ジャーナル・オブ・セル・バイオロジー (The Journal of Cell Biology) 108巻 229-241頁 (1989. 2)〕。

変異の導入はPCRを利用し、pFGF-10を鋳型として 図4に示す、5' 末端にHind III 切断部位およびコザックのコンセンサス配列を有するセンスプライマーと、5' 末端にXba I切断部位を有するアンチセンスプライマーを用いることにより行った（反応条件は図4参照）。

反応終了後、PCR産物をフェノールクロロホルム処理、エーテル処理、ついでエタノール沈澱を行い、Hind III およびXba Iで消化した後、ポリアクリルアミド電気泳動により約700塩基対の断片を単離した。この断片を哺乳動物細胞発現ベクターであるpCDM8のHind III、Xba I消化物とライゲ

ーションし、大腸菌MC1061/P3株を形質転換して得られたコロニーの中から4クローンを選び、DNAシーケンサー（パーキンエルマー373型）を用いて塩基配列の解析を行った。

その結果、いずれのクローンも推定翻訳開始コドン上流の塩基配列はコザックのコンセンサス配列に置換されており、かつコードするアミノ酸配列に影響する変異は起きていなかったもので、これらの中から1クローンを選び、本プラスミドをpCDM8-F10HXと命名した。

【0024】

〔実施例3〕ラットFGF-10発現可能なプラスミドによるCOS-1細胞の形質転換

実施例2で構築したラットFGF-10発現可能なプラスミド、pCDM8-F10SP及びpCDM8-F10HXを通常の方法に従って大量に調製し、塩化セシウム密度勾配超遠心を2回行って精製した。これら2種類のプラスミド及びコントロールとしてpCDM8を用いて、電気パルス法によりCOS-1細胞の形質転換を行った。形質転換された細胞は、リジンセファロースクロマト処理した牛胎児血清10%を含有するDMEMで24時間培養された後、培地を無血清のDMEMに交換、さらに継続して96時間培養された。このようにして得た培養液を遠心後、その上清を分注し-80℃で凍結保存した。

【0025】

〔実施例4〕in situ ハイブリダイゼーション法による軟骨におけるFGF-10 mRNAの発現の確認

・プローブの調製：FGF-10 cDNAをpGEM-Tベクターに組み込み、そのプラスミドを大腸菌JM-109にトランスフェクトした後、大量培養を行い、ファルマシア社のFlexi Prep kitを用いて純度の高いFGF-10 cDNAを精製した。パーキンエルマー373A/DNAシーケンサーを用いて配列を確認したのち、ペーリンガー社のDIG/RNAラベリング キット（SP6/T7）を用いてcRNAプローブを作成した。

【0026】

・切片作成：ウイスター系雌性ラットを3週令で屠殺後、大腿骨と脛骨を関節を

保持した状態で摘出し、軟部組織を除去し、適当な大きさにトリミング後、素早く固定液（4%パラホルムアルデヒド）に浸し、4℃で一晩固定した。脱水後、脱灰液（10%EDTA、15%グリセロール-PBS）に浸し、4~5日間脱灰を行った（毎日、液は交換した）。その後、膝関節前後約2cmにトリミングし、O.C.Tコンパウンドに浸し、液体窒素にて凍結させ、クリオスタットを用いて厚さ10μmの関節組織切片を作製し、シランコーティングスライドガラスにマウントした。

・ハイブリダイゼーション：前述の関節組織切片の前処理（プロテイナーゼK消化、0.2M HClで内在性のアルカリフォスファターゼを不活化、0.1M TEA：0.25%無水酢酸でアセチル化）を行った後、エタノール系列で脱水し風乾した。そして前述のプローブをハイブリダイゼーション液（50%ホルムアミド、10mM Tris-HCl/pH7.6、200μg/ml tRNA、1×Denhardt's solution、10%Dextran sulfate、600mM NaCl、0.25%SDS）で10倍に希釈し、一切片当り50μl載せ、小さく切ったパラフィルムで覆い、50℃で16時間インキュベーションした。RNase Aで不要なプローブを消化しSSCで洗浄した後、抗体反応、発色反応を行った。

【0027】

・抗体反応および発色反応：プローブの洗浄が終わった切片をブロッキング液に60分浸した後、アルカリフォスファターゼ標識抗ジゴキシゲニン抗体（Anti-Digoxigenin-AP: Fab fragment：ベーリンガーマンハイム）を乗せ、37℃で1時間インキュベーションした。抗体液を洗った後、NBT、X-フォスフェイトを加え、37℃でインキュベーションし発色反応を行った（12時間）。発色を確認した後、発色停止液（10mM Tris-HCl/pH7.6、1mM EDTA/pH8.0）に漬け、蒸留水で洗った後、水性封入した。

・結果：図5（A）（B）に示すように軟骨細胞に発色が確認された。FGF-10のmRNAが軟骨細胞に発現していることから、FGF-10は軟骨に対する活性を有する骨および軟骨の損傷修復等に関与する因子であると推定される。

【0028】

〔実施例5〕FRSK細胞を用いた細胞増殖活性の検討

・細胞培養：ラットの上皮細胞であるFRSK細胞は、培養面積75平方cmの培養フラスコ当り15mlの10%ウシ胎児血清を含むF-12培地を用いて、37℃、5%二酸化炭素／95%空気の気相下で培養した。細胞は7日に一度、1／10の割合で継代を行った。

・FGF-10蛋白の発現：FGF-10をCOS-1細胞で一過性に発現させ（実施例3参照）、その培養上清を以下のアッセイに供した（以下、pCDM8-F10SPを用いて得られた培養上清をFGF-10／Sp、pCDM8-F10HXを用いて得られた培養上清をFGF-10／Hx、コントロールプラスミドpCDM8を用いて得られた培養上清をBqと表示する）。

・DNA合成アッセイ（トリチウム標識チミジンの取込み）：細胞をサブコンフルエントまで培養した後、トリプシン処理により細胞を剥がし、上記培地を用いて10000細胞／mlに調整し、96穴プレートに100μlずつ播き込み、37℃、5%二酸化炭素／95%空気の気相下で培養を行った。2日に一度、培地を新しい上記培地100μlに交換し、7日間培養を行った後、培地を0.1%ウシ血清アルブミンを含むF-12培地100μlに交換した。24時間後、COS上清を25μl添加し、18時間37℃、5%二酸化炭素／95%空気の気相下で培養を行い、0.2μCiのトリチウム標識チミジンを含むF-12培地20μlを添加、引続き同条件下で培養した。4時間後培地を除去し、2N NaOHを50μl添加して30分静置、細胞を死滅させた。1N HClで中和後、細胞をセルハーベスターで回収し、ベータプレートにてカウントを計測した。

・結果：図6に示すように、コントロール群：Bq（100%）と比較して、FGF-10発現群：Sp、HxはFRSK細胞のトリチウム標識チミジンの取込みを大きく増加させた（各々286%、501%）。FGF-10は上皮細胞の増殖を促進する因子であることが示唆される。

【0029】

〔実施例6〕ヒトFGF-10遺伝子の構造解析

・ヒト遺伝子ライブラリーの調製

市販のヒト肺ポリ(A)+RNA〔クローンテック (clontech) 社 : カタログ番号6524、成人男性全肺由来〕を鋳型に、ランダムプライマー(6mer)をプライマーとして、モロニーマウス白血病ウィルス逆転写酵素を用いてヒト肺cDNAを調製した。すなわち、ヒト肺ポリ(A)+RNA(5 μ g)を300ユニットのMoloney murine leukemia virus reverse transcriptase (GIBCO-BRL)、15ユニットのhuman placenta RNase inhibitor (和光純薬工業) および0.5 μ gのランダムプライマー(6mer)を含む反応溶液中で37℃60分インキュベートして、cDNAを得た。

【0030】

・ヒトFGF-10遺伝子増幅用プライマーの作成およびヒトFGFファミリーDNAの増幅

実施例1で使用した、図1に示す2種類のFGFプライマー(Tyr-Leu-Ala-Met-Asn-Lys、Tyr-Asn-Thr-Tyr-Ala-Ser)を選び、ヒトFGF-10遺伝子増幅に用いた。

ヒト肺cDNAを鋳型にし、上記の2種類のFGFプライマーとTaq DNA polymeraseを用いたpolymerase chain chain (PCR) 法によりFGFファミリーDNAを増幅した。即ち、適当量のcDNA、0.05ユニット/ μ lのTaq DNAポリメラーゼ(和光純薬工業) および5 pmol/ μ lの前述のセンスまたはアンチセンスプライマーを含む反応溶液(25 μ l)を30サイクルのPCRに供した。反応後、溶液を8%ポリアクリルアミドゲル電気泳動にかけ、所望のサイズ(～110塩基対)のフラクションを電気泳動で溶出した。

【0031】

・ヒトFGFファミリーDNAのスクリーニング

FGFプライマーにより増幅したFGFファミリーDNAをpGEM-T DNA vector (Promega) に挿入し、得られた組換えベクターを大腸菌(XL1-blue株)に感染させ、DNAクローンを得た。cDNA配列の

解析には、DNAシーケンサー373A (Applied Biosystems Inc.) を用いた。

各DNAクローンの塩基配列を決定したところ、ラット型FGF-10と同一の配列を有するペプチドをコードするcDNAが増幅されていた。この遺伝子はヒトFGF-10をコードするものと考えられた。

【0032】

・ヒトFGF-10 cDNAの全翻訳領域の構造解析

実施例1と同じ方法でヒトFGF-10全翻訳領域を含むcDNAを増幅及び解析し、配列番号：4の塩基配列を決定した。詳細は以下〔1〕～〔6〕に示す。

【0033】

〔1〕ヒトFGF-10 cDNAの部分構造からプライマーA' およびD' (図2、配列番号：13および14) を作成した。プライマーB、C、XおよびY (図2、配列番号：5、6、7および8) は実施例1で使用したものを流用した。用いた。〔2〕ランダムヘキサオリゴヌクレオチドをプライマーとして用いてヒト肺mRNAを鋳型として逆転写酵素によりcDNAを合成した後、デオキシアデニン三リン酸の存在下に3' デオキシヌクレオチジルトランスフェラーゼを作用させて3' 末端にポリ(A)配列を付加した。このようにして得られたcDNAを鋳型としてプライマーA' およびXを用いてPCRを行い、さらに、プライマーBおよびYを用いてPCRを行った。得られた増幅断片をpGEM-Tに挿入し、大腸菌(XL1-blue)を形質転換することにより、上記の部分配列の一部を含むクローンが得られたので、これをphFGF-10(5')と命名した。〔3〕プライマーXを用いてヒト肺mRNAを鋳型として逆転写酵素によりcDNAを合成した。このようにして得られたcDNAを鋳型として、プライマーCおよびXを用いてPCRを行った。さらに、プライマーD' およびYを用いてPCRを行った。得られた増幅断片をpGEM-Tに挿入し、大腸菌(XL1-blue株)を形質転換することによりクローン化した。数クローンの塩基配列を決定したところ、上記の部分配列の一部を含むクローンが得られたので、これをphFGF-10(3')と命名した。〔4〕phFGF-10(5')より得られた翻訳領域上流部分の塩基配列は、ラット型遺伝子と同じ配列を含ん

でいたので、5'側のプライマーとしてプライマーE（図2：配列番号12）を流用した。また、p h F G F-10（3'）より得られた最も下流部分の塩基配列の塩基配列から、3'側のプライマーとして新たにプライマーF'（図2：配列番号15）を作成した。〔5〕ヒト肺mRNAを鋳型として、オリゴdTをプライマーとして逆転写酵素により、cDNA第一鎖を得た。これを鋳型としてプライマーEおよびF'を用いてPCRを行った。得られた増幅断片をp G E M-Tに挿入し、大腸菌（X L 1-blue株）を形質転換することによりクローン化した。数クローンの塩基配列を決定したところ、p h F G F-10（5'）より得られた翻訳領域上流部分の塩基配列と、p h F G F-10（3'）より得られた最も下流部分の塩基配列の塩基配列を連続して保持するクローンが得られた。この中の1クローンを選び、p h F G F-10と命名した。このプラスミドに担持される全翻訳領域を含むヒトF G F-10 cDNAを解析した。〔6〕以上の結果を総合し、配列番号：4の塩基配列（690bp）を決定した。

〔0034〕

・ヒトF G F-10の全アミノ酸配列の決定

上記実験で得られたcDNAの塩基配列より、ヒトF G F-10 cDNAの翻訳領域は624bpからなり、ヒトF G F-10は配列番号：2で示される208アミノ酸からなるポリペプチドであることが明らかになった。また、アミノ酸配列の検討から、N末端にシグナル配列を有する分泌型の蛋白であることが分かった。マチュア部分は、38-208位で、171アミノ酸からなるポリペプチドと目される。51-53位に存在するA s n-S e r-S e r、196-198位のA s n-T h r-S e rは、N結合型糖鎖結合配列であり、この部位に糖鎖を有している可能性がある。

〔0035〕

〔実施例7〕ヒトF G F-10成熟蛋白の発現と精製

p F G F-10を鋳型として以下のプライマーペア（配列番号：16、配列番号：17）を用いて15サイクルのPCRを行い、フェノール/クロロホルム処理後エタノール沈殿を行い、さらにN d e IおよびB a m H Iで消化し、ポリアクリルアミドゲル電気泳動にて目的の大きさのバンドを分取することにより、ヒト

FGF-10 cDNAの成熟アミノ酸配列に相当するDNA断片(a)を得た。一方、大腸菌発現ベクターであるpET11c(ストラタジーン)をNdeIおよびBamHIで消化し、アガロースゲル電気泳動にて分取することにより直鎖化したベクターDNA(b)を得た。これら(a)と(b)をライゲーションし、大腸菌JM109を形質転換することによりクローン化した。これらの中から(a)が正しい方向に挿入されたプラスミドを単離し、塩基配列の確認を行い、pET-hFGF-10を得た。これを用いて大腸菌BL21(DE3)を形質転換した。得られた組換えエクロンのうちの1つをBL21(DE3)/pET-hFGF-10と名づけ、これを用いてヒトFGF-10の発現生産を行った。

【0036】

BL21(DE3)/pET-hFGF-10をアンピシリン100 μ g/mlを含むLB培地10mlに植菌したものを4本用意し、37℃で一晩前培養を行った。翌日それぞれ全量を100 μ g/mlを含むTB培地500ml \times 4本に植え込み37℃で振とう培養した。OD600=0.8に達した時点でIPTGを最終濃度が1mMになるように添加し、培養温度を28℃に下げてさらに6時間培養を継続した。

【0037】

培養液を遠心分離し、得られた菌体を50mMTris-HCl, pH8.0にて1回洗浄し、1mMEDTA、2 μ g/mlロイペプチン、2 μ g/mlペプスタチン、1mMPMSFを含む50mMTris-HCl, pH8.0に懸濁した。超音波破碎により菌体を破碎し、ベックマンJ2-21M/E高速冷却遠心機にてJA-20ローターを用いて、15000回転で1時間遠心分離することにより上清を採取した。HiTrap Heparin(5ml, ファルマシア)を50mMTris-HCl, pH8.0で平衡化し、先に調製した菌体破碎上清をアプライした。続いて50mMTris-HCl, pH8.0で溶出液のA260がベースラインに戻るまで洗浄した後、連続的にNaCl濃度勾配を3Mまで増加させることにより、蛋白を溶出した。組換えヒトFGF-10に相当する約19kDaの蛋白は約1.2M NaClの位置に溶出された。

なお、流速は2 ml / 分で行った。

【0038】

続いて、上記溶出画分を50 mM Tris-HCl, pH 8.0で2倍希釈し、Hi Trap SP (5 ml, ファルマシア) にアプライした。50 mM Tris-HCl, pH 8.0で洗浄した後、連続的にNaCl濃度勾配を2Mまで増加させることにより、蛋白を溶出した。組換えヒトFGF-10に相当する約19 kDaの蛋白は約1.2M NaClの位置に溶出された。なお、流速は2 ml / 分で行った。次に、上記溶出画分を透析によりPBS (-) に置換し、さらにエンドトキシンを除去するために1/10量のパイロセップ1C (ダイセル工業) を添加し、2時間4℃で振とうした後、上清を回収した。エンドトキシン濃度をエンドスペースES-6 (生化学工業) を用いて定量した結果、検出限界以下であった。得られた蛋白をプロテインアッセイキット (バイオラッド) を用いて定量した結果、総計3.5 mgの蛋白が得られたことが明らかとなった。

【0039】

〔実施例8〕骨組織に及ぼすFGF-10の影響

以下、製剤例および試験例により本発明の骨 (軟骨) 疾患治療剤の製剤および骨 (軟骨) 組織形成・修復作用効果について説明する。

・製剤：実施例7の方法で作成した精製ヒトFGF-10成熟蛋白を用いて、注射用水溶液を調製した。即ち、ヒトFGF-10 (2.12 mg) を生理食塩液 (1 ml) に溶解させ、下記の実験に供した。

【0040】

・in vivo薬効評価試験：骨組織に及ぼすFGF-10の影響

4週齢のWistar系雄性ラット (体重94~120 g) を1群3ないし4個体として計3群用意した。エーテル麻酔下で27ゲージ針のマイクロシリンジを用いて脛骨骨髓腔内に前記製剤例1で調製したFGF-10水溶液剤を用いて、それぞれ10.6、21.2 μ g 骨髓腔に相当する液量を投与した。一群には対照群として生理食塩液を投与した。

【0041】

4日間飼育した後、屠殺し、脛骨を摘出した。脛骨の軟X線写真を撮影し写真像

をスキャナーを用いてパーソナルコンピュータに取り込み、画像処理プログラムを使用して、骨形成の像を観察した。

【0042】

FGF-10投与群の観察結果を図7に対照群の観察結果を図8に示した。ヒトFGF-10投与群においては、骨形成の亢進を示す石灰化部分の増加が認められる。ヒトFGF-10注入4日目の骨髓腔内の骨形成について、軟X線写真の画像解析像から評価した結果を表1に示す。

【表1】

FGF-10 (μ g)	0	10.6	21.2
匹数	3	4	4
対照群と比較して骨形成亢進が認められた匹数	—	4	4

これらの結果、ヒトFGF-10は骨／軟骨疾患治療で重要な骨／軟骨組織の明らかな形成・修復促進作用を示した。

【0043】

【発明の効果】

以上の結果から明らかなごとく、ヒトFGF-10は、優れた骨／軟骨組織新生ないし再生作用を有し、骨／軟骨組織疾患の治療に有用であることを見出した。このことより、本発明の骨／軟骨疾患治療剤は、たとえば（1）変形性関節症、慢性関節リウマチ等自己免疫疾患に伴う関節炎により生じた軟骨欠損の修復、（2）外傷による軟骨欠損、離断性骨軟骨炎により生じた軟骨欠損の修復、（3）椎間板変性あるいは椎間板ヘルニア等の脊椎疾患の治療等、（4）自家軟骨を温存する骨きり術時の軟骨形成促進、（5）骨折後の修復、（6）骨欠損後の修復、（7）骨粗鬆症等で局所的に骨減少が認められた部位の骨形成促進等に有用であり、各種骨／軟骨組織疾患治療に用いられる。

本発明は、FGF-10をコードするDNA、当該DNAを担持した発現ベク

特平 8-214378

ター、形質転換体、それらを用いた組換え蛋白の製造方法、および組換え蛋白を提供すると共に、この新規な因子を用いた医薬を提供するものである。

【0044】

【配列表】

配列番号：1

配列の長さ：215

配列の型：アミノ酸

トポロジー：直鎖状

配列の種類：ペプチド

起源

生物名：ラット

配列

Met	Trp	Lys	Trp	Ile	Leu	Thr	His	Cys	Ala	Ser	Ala	Phe	Pro	His	Leu
1				5					10					15	
Pro	Gly	Cys	Cys	Cys	Cys	Phe	Leu	Leu	Leu	Phe	Leu	Val	Ser	Ser	Val
			20					25					30		
Pro	Val	Thr	Cys	Gln	Ala	Leu	Gly	Gln	Asp	Met	Val	Ser	Pro	Glu	Ala
			35				40					45			
Thr	Asn	Ser	Ser	Ser	Ser	Ser	Ser	Ser	Ser	Ser	Ser	Ser	Ser	Ser	Phe
	50					55					60				
Ser	Ser	Pro	Ser	Ser	Ala	Gly	Arg	His	Val	Arg	Ser	Tyr	Asn	His	Leu
65				70					75					80	
Gln	Gly	Asp	Val	Arg	Trp	Arg	Lys	Leu	Phe	Ser	Phe	Thr	Lys	Tyr	Phe
			85					90					95		
Leu	Lys	Ile	Glu	Lys	Asn	Gly	Lys	Val	Ser	Gly	Thr	Lys	Lys	Glu	Asn
			100					105					110		
Cys	Pro	Tyr	Ser	Ile	Leu	Glu	Ile	Thr	Ser	Val	Glu	Ile	Gly	Val	Val
			115					120					125		
Ala	Val	Lys	Ala	Ile	Asn	Ser	Asn	Tyr	Tyr	Leu	Ala	Met	Asn	Lys	Lys
		130				135					140				
Gly	Lys	Leu	Tyr	Gly	Ser	Lys	Glu	Phe	Asn	Asn	Asp	Cys	Lys	Leu	Lys
145					150					155				160	

特平 8-214378

Glu Arg Ile Glu Glu Asn Gly Tyr Asn Thr Tyr Ala Ser Phe Asn Trp
 165 170 175
 Gln His Asn Gly Arg Gln Met Tyr Val Ala Leu Asn Gly Lys Gly Ala
 180 185 190
 Pro Arg Arg Gly Gln Lys Thr Arg Arg Lys Asn Thr Ser Ala His Phe
 195 200 205
 Leu Pro Met Val Val His Ser
 210 215

【0045】

配列番号：2

配列の長さ：208

配列の型：アミノ酸

トポロジー：直鎖状

配列の種類：ペプチド

起源

生物名：ヒト

配列

Met Trp Lys Trp Ile Leu Thr His Cys Ala Ser Ala Phe Pro His Leu
 1 5 10 15
 Pro Gly Cys Cys Cys Cys Cys Phe Leu Leu Leu Phe Leu Val Ser Ser
 20 25 30
 Val Pro Val Thr Cys Gln Ala Leu Gly Gln Asp Met Val Ser Pro Glu
 35 40 45
 Ala Thr Asn Ser Ser Ser Ser Ser Phe Ser Ser Pro Ser Ser Ala Gly
 50 55 60
 Arg His Val Arg Ser Tyr Asn His Leu Gln Gly Asp Val Arg Trp Arg
 65 70 75 80
 Lys Leu Phe Ser Phe Thr Lys Tyr Phe Leu Lys Ile Glu Lys Asn Gly

特平 8-214378

	85		90		95
Lys Val Ser Gly Thr Lys Lys Glu Asn Cys Pro Tyr Ser Ile Leu Glu					
	100		105		110
Ile Thr Ser Val Glu Ile Gly Val Val Ala Val Lys Ala Ile Asn Ser					
	115		120		125
Asn Tyr Tyr Leu Ala Met Asn Lys Lys Gly Lys Leu Tyr Gly Ser Lys					
	130		135		140
Glu Phe Asn Asn Asp Cys Lys Leu Lys Glu Arg Ile Glu Glu Asn Gly					
145		150		155	160
Tyr Asn Thr Tyr Ala Ser Phe Asn Trp Gln His Asn Gly Arg Gln Met					
	165		170		175
Tyr Val Ala Leu Asn Gly Lys Gly Ala Pro Arg Arg Gly Gln Lys Thr					
	180		185		190
Arg Arg Lys Asn Thr Ser Ala His Phe Leu Pro Met Val Val His Ser					
	195		200		205

【0046】

配列番号：3

配列の長さ：804 b p

配列の型：核酸

鎖の数：二本鎖

トポロジー：直鎖状

配列の種類：cDNA

起源

生物名：ラット

存在位置：109-753

特徴を決定した方法：E

配列

TAACCAGTAG CCATCACCTC CAGCTGTCTC TTGCCTCGC ACCAGGTCTT ACCCTTCCAG 60

TATGTTTCCTT CTGATGAGAC AATTTCCAGT GCC■

TGG ATA CTG ACA CAT TGT GCC TCA GCC TTT CCC CAC CTG CCG GGC TGC	165
TGT TGC TGC TTC TTG TTG CTC TTC TTG GTG TCT TCC GTC CCT GTC ACC	213
TGC CAA GCT CTT GGT CAG GAC ATG GTG TCA CCG GAG GCT ACC AAC TCC	261
TCT TCC TCC TCC TCT TCC TCC TCC TCG TCC TCT TCC TTC TCC TCT CCT	309
TCC AGC GCG GGG AGG CAT GTG CGG AGC TAC AAT CAC CTC CAG GGA GAT	357
GTC CGC TGG AGA AAG CTG TTC TCC TTC ACC AAG TAC TTT CTC AAG ATT	405
GAA AAG AAC GGC AAG GTC AGC GGG ACC AAG AAG GAA AAC TGT CCG TAC	453
AGT ATC CTA GAG ATA ACA TCA GTG GAA ATC GGA GTT GTT GCC GTC AAA	501
GCC ATT AAC AGC AAC TAT TAC TTA GCC ATG AAC AAG AAG GGG AAA CTC	549
TAT GGC TCA AAA GAA TTT AAC AAT GAC TGT AAA CTG AAA GAG AGG ATA	597
GAG GAA AAT GGA TAC AAC ACC TAT GCA TCT TTT AAC TGG CAG CAC AAC	645
GGC AGG CAA ATG TAT GTG GCA TTG AAT GGA AAA GGA GCT CCC AGG AGA	693
GGA CAA AAA ACA AGA AGG AAA AAC ACC TCC GCT CAC TTC CTC CCC ATG	741
GTG GTC CAC TCA TAGAAGA AGGCACCGTT GGTGGATGCA GTACAACCAA TGACTCTTTG	800
CCAA	

【0047】

配列番号：4

配列の長さ：690bp

配列の型：核酸

鎖の数：二本鎖

トポロジー：直鎖状

配列の種類：cDNA

起源

生物名：ヒト

配列

*** 文字がはみ出したため表示できませんでした ***

TGG AAA TGG ATA CTG ACA CAT TGT GCC TCA GCC TTT CCC CAC CTG CCC	106
GGC TGC TGC TGC TGC TGC TTT TTG TTG CTG TTC TTG GTG TCT TCC GTC	154
CCT GTC ACC TGC CAA GCC CTT GGT CAG GAC ATG GTG TCA CCA GAG GCC	202
ACC AAC TCT TCT TCC TCC TCC TTC TCC TCT CCT TCC AGC GCG GGA AGG	250
CAT GTG CGG AGC TAC AAT CAC CTT CAA GGA GAT GTC CGC TGG AGA AAG	298
CTA TTC TCT TTC ACC AAG TAC TTT CTC AAG ATT GAG AAG AAC GGG AAG	346
GTC AGC GGG ACC AAG AAG GAG AAC TGC CCG TAC AGC ATC CTG GAG ATA	394
ACA TCA GTA GAA ATC GGA GTT GTT GCC GTC AAA GCC ATT AAC AGC AAC	442
TAT TAC TTA GCC ATG AAC AAG AAG GGG AAA CTC TAT GGC TCA AAA GAA	490
TTT AAC AAT GAC TGT AAG CTG AAG GAG AGG ATA GAG GAA AAT GGA TAC	538
AAT ACC TAT GCA TCA TTT AAC TGG CAG CAT AAT GGG AGG CAA ATG TAT	586
GTG GCA TTG AAT GGA AAA GGA GCT CCA AGG AGA GGA CAG AAA ACA CGA	634
AGG AAA AAC ACC TCT GCT CAC TTT CTT CCA ATG GTG GTA CAC TCA TAGAG	684
GAAGGC	690

【0048】

配列番号：5

配列の長さ：22bp

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

GATGCATAGG TATTGTATCC AT

配列番号：6

配列の長さ：21bp

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

TCCATTTTCC TCTATCCTCT C

配列番号：7

配列の長さ：20 b p

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

AGAAGGGGAA ACTCTATGGC

【0049】

配列番号：8

配列の長さ：21 b p

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

GACTGTAAAC TGAAAGAGAG G

配列番号：9

配列の長さ：32 b p

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

GCGAGCTCAA GCTTTTTTTT TTTTTTTTTT TT

配列番号：10

配列の長さ：18 b p

特平 8-214378

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

GCGAGCTCAA GCTTTTTT

【0050】

配列番号：11

配列の長さ：20bp

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

CTTCCAGTAT CATCCTTCTG

配列番号：12

配列の長さ：20bp

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

GGCAAAGAGT CATTGGTTGT

配列番号：13

配列の長さ：22bp

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

GATGCATAGG TATTGTATCC AT

【0051】

配列番号：14

配列の長さ：22bp

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

GAAACTCTAT GGCTCAAAAG AA

配列番号：15

配列の長さ：20bp

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

GTACACTCAT AGAGGAAGGC

配列番号：16

配列の長さ：34bp

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

GGGAATTCCA TATGCTTGGT CAGGACATGG TGTC

配列番号：17

配列の長さ：29bp

配列の型：核酸

鎖の数：一本鎖

トポロジー：直鎖状

配列：

CGCGGATCCG CTATGCATGC AACGCGTTG

【0052】

【図面の簡単な説明】

【図1】FGF-10遺伝子のクローニングに用いた2種類のFGF-3、FGF-7、FGF-10共通プライマー、(A) Tyr-Leu-Ala-Met-Asn-Lys、(B) Tyr-Asn-Thr-Tyr-Ala-Serを示す。

【図2】Rapid Amplification of cDNA Ends (RACE) 法に用いたFGF-10 cDNA単離用プライマーを示す。

【図3】プラスミドpFGF-10から、プラスミドpCDM8-F10SPおよびpCDM8-F10HXを得るまでのプラスミド構築方法の概略。

【図4】翻訳開始コドン上流をコザックのコンセンサス配列に置換するために用いたプライマーおよびPCR反応条件。

【図5】in situ ハイブリダイゼーション法によるラット関節組織におけるFGF-10 mRNAの発現。(A)：関節軟骨標本の顕微鏡写真。

(B)：骨端軟骨板の顕微鏡写真。

【図6】トリチウム標識チミジンのFRSK培養細胞への取込みを示すグラフ。横軸Bqはコントロール、Sp、HxはそれぞれFGF-10発現COS細胞の培養液を加えた場合を示す。縦軸は細胞内の放射活性を示す。

【図7】試験例におけるヒトFGF-10投与群の脛骨軟X線写真の画像処理像である。

【図8】試験例における対照群の脛骨軟X線写真の画像処理像である。